

経済マンスリー [アジア]

注目されるアジアの輸出

アジアの輸出伸び率は 2010 年半ばから鈍化傾向が続いてきたが、ごく足元では下げ止まりへの期待を抱かせる指標もみられる。統計が出揃っている 5 月の輸出動向をみると、単月の動きとはいえ、アジア主要国・地域全体の輸出は前年比+7.1%と 4 月の同+1.2%から持ち直した。これは、貿易ウエイトが大きい中国 (4 月: 前年比+4.9% → 5 月: 同+15.1%) の寄与が大きい、NIEs (同▲1.4% → 同+0.2%) 及び ASEAN (同▲2.1% → 同+2.1%) も 3 カ月ぶりにプラスに転じている (第 1 表)。既に 6 月実績が発表された国・地域をみても、中国が同+11.3%と高めの伸びを続けたほか、韓国が 4 カ月ぶりにプラスとなり、また台湾のマイナス幅もさらに縮小した。韓国・台湾では、電子関連などの在庫調整が進展していることが、輸出下げ止まりの背景とみられる。

5 月の輸出を仕向け地別にみると、米国向けが NIEs を除いて持ち直したことに加え (同+4.8% → 同+11.6%)、多くの国・地域で欧州向けのマイナス幅が幾分縮小した。また、アジア域内貿易では、ASEAN 向け輸出が伸びている (同+11.5% → 同+15.7%)。これは、昨年 10 月に大規模洪水に見舞われたタイの生産が急回復し、春先以降、域内のサプライチェーンが正常化しつつあるからだ。

ただし、このまま輸出の下げ止まり傾向が定着するか否かは不透明だ。在庫調整の一段の進展が見込める NIEs 向けや、サプライチェーン正常化の恩恵のある ASEAN 向けといった域内輸出は、当面は堅調な推移が期待できよう。一方で、先進国向け輸出は、今後一段と力強さを欠くおそれがある。これまで相対的に底堅さを維持してきた米国では、直近 6 月の製造業 ISM 指数が「拡大と縮小の境目」である 50 を割り込んだ。欧州では債務問題が深刻化しており、今年 2 月から 50 を下回っているユーロ圏製造業 PMI (購買担当者指数) は直近 7 月もさらに悪化した (第 1 図)。

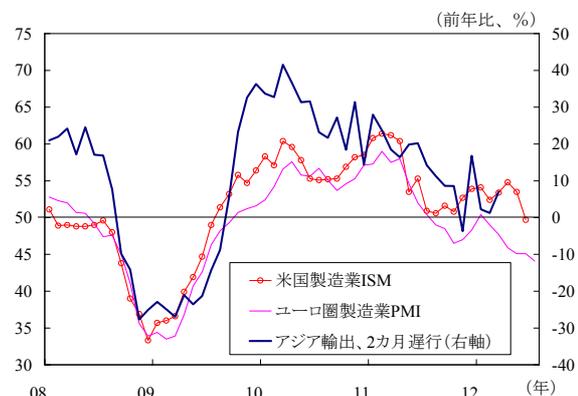
ここ 2 年間のアジア経済は、内需が比較的堅調ななかで、外需が下押し要因となってきた。そうした構図に遂に変化が生じるのか否か、今後が注目される。

第1表: アジア主要国・地域の輸出

	(前年比、%)				
	11/Q4	12/Q1	4	5	6
中国	14.3	7.6	4.9	15.1	11.3
韓国	9.0	3.0	▲5.0	▲0.6	1.3
台湾	4.5	▲4.0	▲6.5	▲6.3	▲3.2
香港	6.7	▲1.1	5.8	5.3	N.A.
シンガポール	7.1	5.9	1.1	1.3	▲3.9
NIEs	7.2	1.4	▲1.4	0.2	N.A.
インドネシア	9.4	6.9	▲2.3	▲8.5	N.A.
マレーシア	8.6	4.0	▲1.7	3.8	N.A.
タイ	▲5.2	▲4.0	▲3.5	6.7	N.A.
フィリピン	▲17.5	5.4	7.7	20.0	N.A.
ASEAN4	2.1	2.6	▲2.1	2.1	N.A.
アジア9カ国・地域	9.5	4.1	1.2	7.1	N.A.

(資料) CEICより三菱東京UFJ銀行経済調査室作成

第1図: 欧米の製造業景況感とアジアの輸出



(資料) CEIC、Bloombergより三菱東京UFJ銀行経済調査室作成

照会先：三菱東京UFJ銀行 経済調査室 矢口 満 mitsuru_yaguchi@mufg.jp
竹島 慎吾 shingo_takeshima@mufg.jp

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の売買や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願ひ申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当室はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。また、当資料全文は、弊行ホームページでもご覧いただけます。